

乳児期初期における母子の身体関係について

—筆者の体験の現象学的事例研究—

学校教育開発学コース 深山 茜

The Mother and Child Relationship in Early Infancy Focusing on Their Body Contact
A Phenomenological Case Study Based on the Author's Experience

Akane MIYAMA

This paper aims to make clear the fundamental relationship between mother and a-month-old child, based on the author's own experience.

The author tries to clarify how the persons involved in the situation relate to each other. Based on Buber's thought, they do not interact with each other as a chain of action and reaction, but are unified inseparably in the flow of acts. From this point of view, it is impossible for them to objectify this relationship. Consequently, the mode of existence should be elucidated by focusing on the context where persons meet and relate to each other.

Both the author's child being held comfortably and the author holding well are thrown into the possibility of occurring with holding and being held at the same time.

目次

はじめに

I 関係における人間の存在様式

A 作用の及ぼし合いとしての関係

B 生きられている関係とその記述

II 身体的に対峙している他者との関わり

A 身体状態の感受

B 身体状態の感受と表出に基づく関わり

C 身体活動における作用の及ぼし合い

おわりに

はじめに

本稿は、筆者自身の子育ての記録に即して、個別的な関わり場面における、筆者の子どもである葵(仮名)と母親である筆者の存在様式の記述と解明をめざしたものである。本稿で考察される場面は、葵が生後一ヶ月頃のものであり、この頃の関わりは、葵を抱くことと、泣き止ませることが中心となっている。

筆者は、最初の頃、葵を上手に抱くことや、うまく

泣き止ませることができなかった。この頃の筆者は、葵に対応しようとして、葵の動きをとらえようとしたり、上手に抱いている筆者の母や夫の抱き方を真似ようとしたりした。しかし、こうしたことによっては、筆者は葵を上手に抱けるようにはならなかった。このことは、確かに、筆者の個別的な一事例にすぎない。しかし、こうした体験は、子どもと関わるということには、子どもをとらえようとすることや、とらえた事柄に即して関わること以前の何かが潜んでいる、ということ筆者に気づかせるきっかけとなった。子どもと関わることの根源で生じているこの「何か」とは果たしていかなることなのだろうか。本稿では、この「何か」に迫ることをめざしたい。

まずは、ブーバーに基づき、根源的な関係における人間の存在様式について考察し、さらに、中田と共に、根源的な関係を記述する意義とめざされるべき記述とはどのようなものであるべきかを探ることで、本稿における事例研究の理論的枠組を示しておきたい。

1 関係における人間の存在様式

A 作用の及ぼし合いとしての関係

ブーバーによれば、我—汝という「関係のなかに立っている」人間は、何かを知覚したり、経験したり、感情の対象としたりすることが、すなわち「何かを対象物として有する」ことがない¹⁾、とされる。このことからすると、葵の状態をとらえようとしている時の筆者は、葵との関係のなかに立っているのではないことになる。

そもそも「はじめ」にあるのは、「我それ自体」や「存在それ自体」²⁾ではなく、「関係」³⁾である、とブーバーは言う。さらに、「関係とは相互的なもの」⁴⁾であり、関係において、「私が私の汝において作用するように、私の汝は私において作用する」⁵⁾のである。

しかも、関係における我が、己と隔てられていない「汝に対して生身の存在として向かいあって」⁶⁾いる以上、この時の相互性とは、作用と反作用が時間的に連なるような仕方では、両者が相互に作用を及ぼし合っていることではない、ということになる。したがって、関係とは、身体的な対峙であり、「相互性」すなわち作用の「流れ」⁷⁾そのもの、ということになる。

以上のことからすると、関係のなかに立っている二人の人間について記述する時には、両者を分け隔てることはできないことになる。確かに、日常的な子育ての場面を観察している鯨岡は、例えば、生後一ヶ月頃の母子関係における「繋り」を「子どもの訴え→それへの養育者の対応」といった直線的な関係を越えた、…複雑な関係⁸⁾として記述し、考察している。しかし、鯨岡のいう複雑さとは、母親の対応への子どもによる予期や期待、あるいは子どもの欲求の強さの母親による読みといった、子どもと母親のそれぞれにおける作用と反作用の結びつきの複雑さでしかない⁹⁾。

他方、ブーバーがというような根源的な関係は、関係のなかに立っている二人の人間間における作用と反作用の時間的連鎖としてとらえられない以上、どのような仕方でも記述されうるのであろうか。そもそも、記述することは、対象化することであり、対象化されたものは、もはや関係そのものではない。ブーバーも、記述によってのみならず、「このわれわれの世界におけるあらゆる汝がそれにならざるを得ぬということは、人間の運命の崇高な憂鬱である」¹⁰⁾、と述べている。

それでは、関係はいかに記述されうるのであろうか。以下で、関係と記述に関する中田の論を手がかりとし

ながら、ブーバーの思索における根源的な関係をより具体化し、本来矛盾をはらんでいる、関係の記述のあり方とその意義を明らかにしたい。

B 生きられている関係とその記述

ブーバーのいう相互性を中田は次のように明確にとらえなおしている。関係の相互性は、「為すことと蒙ることが一つの生起の『二面性』となっているような相互性を意味している」¹¹⁾、と。こうした相互性においては、他者と私が「お互いに身体的に対峙し合っている」以上、「他者に対する私の喚起的な働きかけによって、他者の意識を揺さぶり、私の存在に他者の心に向けさせる」(p.117)¹²⁾、ということが起こっているだけではない。私は、「同様のことを、他者が私に働きかけてくる時にも体験するだけでなく、さらには、他者に対する私自身の作用によっても、私はなんらかの作用を受動的に蒙ることができる」(p.117)。つまり、私は、子どもに何らかの作用を及ぼし、自らの活動に対するいわゆる反作用として、子どもから何らかの作用を蒙るだけでなく、子どもへの自らの作用を自ら蒙ることができるのである。例えば、私は、うまく子どもを抱けない時のように、子どもに身体的な苦痛を与える可能性のある働きかけをしなければならない時に、自らの作用をより敏感に自分自身に蒙ることで、身体的な苦痛によって子どもが泣き出す前に、私の「働きかけが子どもに対しどのような作用を及ぼすことになるのかを、まず自分自身で感じる」(p.123)ができるようになる。そして、この作用を「自ら蒙っている自分自身の存在もまた、子どもに作用を及ぼすことになる」(p.123)。したがって、子どもに身体的に対峙することによって、子どもに対する自分自身の働きかけの作用を自ら蒙っている筆者の関わりは、子どもの存在をすでに含みこんでおり、子どもからの反作用を蒙る以前にすでに、一方的に子どもに関わるというあり方から脱したものになっている。

自分自身への子どもの作用を敏感に蒙るということは、例えば、目の前にいる子どもが、空腹ではないか、暑くはないか、ということの思いやることにより、その結果として子どもに敏感に対応する、といったことだけを意味するのではない。筆者が思いやることによってとらえられるだけの子どもは、筆者によって想定されているだけの他者でしかない。この時には、筆者は一個の実存としての子どもに関わっていることにはならない。さらにまた、子どもへの筆者の作用を筆者自らが敏感に蒙るということは、子どもへの筆者の関わり

り方の適切さによって、例えば、子どもが、授乳によって満腹になっているのか、心地よく眠ることができているのか等を気遣う、ということだけでもない。こうしたことを気遣っている時の筆者は、「今ここで」子どもに関わっているのではなく、過ぎ去った自らの関わりを想起しているだけでしかない。

自らの作用を蒙ることは、重障児との関わりに基づく中田の記述を手がかりにして具体化すると、以下のようになろう。中田は、泣き叫んでいる重障児を抱いている中田自身が、「自己の身体活動を『抱いてあやす』という意味により主題化するだけでは、彼女の泣き叫びを理解することができなかった」のだが、「『自ら立って動きながら抱いてあやす』というように、新たに身体活動を主題化しなおすことにより、はじめて彼女の泣き叫びが変化したのであり、また彼女の泣き叫びの原因もより良く了解された」ということから、重障児と関わる者自身が、「自己のいかなる身体活動を主題化するかにより、重障児の経験遂行の了解が異なってくる」¹³⁾、と述べている。したがって、自らの作用を敏感に蒙るとは、他者と身体的に関わることによって、その他者と関わらなくては主題化されなかったようなレベルで、自らの身体活動をとらえるようになる、と考えられる。そしてこのことは、当事者によってのみ可能となることである。

しかし、こうした作用の流れは、関係のなかに立っている当事者が何かを経験することや、対象化することができないために、当事者にとっては常に潜在的である¹⁴⁾。こうした事態を顕在化することは、関係を対象化するという結果を免れえない。顕在化された汝は確かにそれ化されているのだが、このそれ化は、関係の汝と対峙することによって、それまでは潜在性のうちにとどまっていたところの、関係のなかに立っている両者の存在様式を現在の対峙の形姿として現わせしめる。それゆえ、こうした生起を逆にたどることにより、すなわち、日常的には、それとの対比によって際立たせられているだけでしかない我が、それゆえ希薄化されてしまっているだけの我が、こうした生起の根拠へと帰向していくことにより、それ化された汝と対峙している我も、関係そのものの存在様式へと迫っていけるのである。関係の記述においては、以上のようなことを鑑みて、帰向と離反、顕在性と潜在性との交替の内を生きることが必要とされる¹⁵⁾。

関係についての以上の中田の考察を手がかりとしながら、本稿では、筆者の子どもである葵と筆者自身との関わり方の記録に基づいて、子どもと筆者との関係に

おいて生起している事態の解明を試みることにしたい。

II 身体的に対峙している他者との関わり

A 身体状態の感受

生後一ヶ月頃における関わりを考察するために、まず、この時期の葵の様子を以下の記録に即して明らかにしておきたい。

[記録1(1;11)](授乳後)葵は泣かずに起きていて、「あっくー」などという声を出している。私は、葵の片手を取って少し引っ張り、葵の体側を伸ばすように、からだをゆっくりと横向きにして背中をマッサージする。それから、私は、葵の姿勢をもとに戻して、今度は葵の反対側の手をとり、同じような仕方でも反対側の体側を伸ばし、また背中をマッサージする。葵は、されるがままにからだの力を抜いて、気持ちよさそうな表情を浮かべる。私は、気持ちよさそうな葵の様子に喜びを感じ、3回も繰り返す。すると、葵の表情やからだの動きが硬くなる。私は、しつこかったかなあとと思い、手を離し、葵のからだを仰向けの状態に戻す。

葵は、筆者によってもたらされる身体姿勢の変化を、心地よいものとして受け入れることができている。しかし、このことから、葵自身に身体姿勢の変化が変化として感覚されている、ということとはできない。中田は、「完全な脱力状態とは、身体運動のどのような可能性にも予め投げ込まれることなく、現在の身体状態を受動的に感受し、甘受しているだけの状態のことではない」(p.98)、と述べている。すなわち、この時の葵の身体は、「されるがまま」の脱力した状態にあり、葵は、筆者によってもたらされた身体姿勢の変化に対して、自分から何らかの姿勢をとっているのではなく、現在の身体状態を心地よいものとして感じているだけでしかない。筆者が葵の身体にそのつど同じ姿勢となるような変化をもたらすといった仕方でも葵の体側を伸ばしていても、姿勢のこの変化が葵にとって心地よい身体状態でなくなれば、葵は表情とともに身体を硬くしてしまうのである。

したがって、この時の葵は、自ら姿勢を変えようとすることなく、身体の諸部分の動きや他者からもたらされた姿勢を生きており、他者によって身体姿勢の変化が受動的にもたらされている時には、結果として生じる身体姿勢を、心地よい、あるいは心地悪いという全身的な身体状態として感受することができ、さらに、感受した身体状態を表情や身体全体を硬くしたり力を

抜いたりすることによって表出している、といえる。

B 身体状態の感受と表出に基づく関わり

以上のことが可能になる以前は、葵が一度満腹になって眠ってしまえば、筆者は、葵の身体の動きに特に気をつけることなく、葵を寝かしつけることができた。また、葵が泣いていない時であれば、しっかりと抱いていさえすれば、葵を抱き続けることができた。しかし、自分のとっている姿勢が心地悪ければ、身体全体を硬くしたりすることができるようになった、この時期の葵は、筆者に抱かれることで、むしろ落ち着かない様子を見せるようになってきたのである。

[記録2(0;25)](私に抱かれていると葵がどうしても眠らないので、母に寝かせてもらう。)私は母にお礼をいい、冗談めかして、「葵は私に抱かれるのを嫌がってるの」、と言う。母は笑わない。そして、「子どもをあやせなければ、一人になったら、葵もあなたも困る」、と真剣な声で母は言う。葵が生まれたばかりの頃、母は、赤ん坊なんてお尻とお腹さえきちんとおけばそれだけでいい、と私を励ましてくれていた。いつまでも葵をうまく抱っこできない私に、母は違和感を覚えたのだろう。私も少しまじめになって、「あやすのが下手だよ」、と言う。そして、私が、「肘にのせて、もう片方の手で背中をトントンするんだよ」、と言って、母の真似をして抱く格好を作って見せると、母は、自分の抱き方が私にもっと見えるように私の方へからだをかたむけ、もう少しすっぽり包んだ方がいい、などと言いかけたが、思い直したようにからだをもとに戻した。そして、何かを考えるように黙って葵を揺らしていた母は、「テレがあるのよ」、「葵をしっかり受け止めてあげないと」、「もっと二人の世界に入る」、「高いところから見下すのではなくて、赤ちゃんと一体化して同じレベルになる」、などと言出す。

[記録3(0;26)]私は葵の機嫌がいい時に抱っこするが、葵はもぞもぞして心地悪そうにする。母や祖母や夫に抱かれると、葵の動きはぴたっと止まる。今日も、夫が、私から葵を抱き取り、抱っこして落ち着かせ、私の方を得意げにみやった。夫は、「下手くそ。もうお母さんはおっぱいだけだね」、と憎まれ口をたたく。私は、反論したいが、夫の腕の中で静かに目をあけている葵を見ると言葉に詰まり、「じゃあ、どうやってやるのか教えてよ」、と言い、葵を抱き取る。夫は、「俺だってお義母さんがやるのを真似してただけだよ。茜もお義母さんを見て技

を盗めばいいんだよ」、と言いながら、私の周りをぐるぐると回って、私の腕の上げ下げやからだの揺らし方をチェックしていたが、葵はやがてぐずり出す。

[記録4(0;27)]授乳後、葵はなかなか寝つけない。私は、母から、「からだをすっぽり包むように抱っこすると子どもが落ち着く」、と言われたのを思い出し、葵の一挙一動に対応しようとするが、何度やっても、葵の手や足が投げ出されて、その動きはきりが無い。葵が、足を蹴り出したり、からだを縮めたり、そらせたりするたびに、私は、葵はどこに居心地の悪さを感じているのだろうと思い、私のからだもこわばる。私は、「これ苦しそう?この足は何だと思おう?」、などと、自分でもくだらないと思われることでも母に聞かずにはいられない。

とうとう母が、私に代わって、葵を寝かせてくれた。私より小さな母の腕に、私の手にはあまっていた葵がすっぽりとおさまっている。何なのだろう。

この時の葵や母や筆者の身体のあり方を、以下、緊張性の痙直が強い知的に重度の脳性麻痺児を抱いている時の、子どもと母親や教師の身体に関する中田の記述を手がかりに、考察していきたい。

1. 子どもの動きに追従して抱くこと

[記録4]の場面における筆者は、葵の身体をすっぽりと包み込もうとしているが、うまくいかない。他方、葵をぐずらせずに抱いている母や夫が、葵の手足を難なくくみこんでいるように筆者には思われた。ただし、葵を上手に抱ける母や夫は、葵の身体部分の時間的・空間的動きをとらえているわけではない。葵を上手に抱くことのできない筆者にしても、足を投げ出す葵の行為の意味を「この足は何だと思おう?」と母に問いつつも、同時に、そのように問うことが無意味だと思っている。しかし、投げ出されてくる葵の手足を、投げ出されるがままにうまく抱き、すっぽり包み込んでいる母や夫は、葵の個々の動きに適切に対応している結果、上手に抱けているかのように、筆者にはとらえられる。そして、筆者も、母や夫のように上手に抱けるようになるために、葵の一挙一動に対応しようとするが、うまくいかない。すなわち、足を蹴り出し、からだを縮め、からだをそらせている、そのつどの葵の手足や体幹を、筆者はそのつどすっぽりと抱きくめようとするが、葵の動きは、抱かれ心地の悪そうな動きでしかない、と筆者には感じられ続け、筆者のからだはこわばってしまう。このように、葵の「身体の動きに合わせて、時間的にはその動きにいわば追従す

るような仕方」で、「身体姿勢や抱き方を変えていく」(p.104)だけでは、葵をうまく抱くことはできない。葵はすでに、抱かれ心地が悪い状態で筆者に抱かれてしまっており、そのために、からだを縮めたり、からだをそらしたりしているのである。筆者は、心地悪く抱かれている葵の動きに「追従しつつ」、さらに心地の悪い抱き方へと「抱き方を変えることに、より正確に述べれば、抱き方を変えさせられることになって」(p.104)しまっている。そして、抱かれ心地が悪くなった葵は、その抱かれ心地の悪さに応じて動いてしまう。筆者は、葵の居心地の悪そうな様子を感じて、葵の動きにより追従して葵を抱こうとし、上手に抱くことがさらにできなくなってしまう。上手に抱くことができない筆者と心地よく抱かれることができない葵は、以上のようなあり方をしているのであろう。そして、ついには、お互いに、もはや抱かれている、あるいは抱いているという状態ではなくなり、葵はぐずり出し、筆者は何か重く持ちにくい物を持っている時のように、からだがかわばってしまう。

確かに、上手に抱くことができない筆者とは対照的に、上手に抱けている母や夫は、葵と身体的に直接接触していない筆者からすると、心地よく抱かれている葵の動きに追従しているようにみえる抱き方によっても、上手に抱き続けられるのである。

2. 抱く姿勢と抱かれる姿勢との一体的な変化

しかし、上手に抱くためには、心地よく抱かれている葵の動きに追従するだけでは不十分であることを、以下の記録に従ってさらに考察したい。

[記録5(0;28)]ぐずっていた葵が私の腕の中でついに半分くらい眠りかける。私の後ろから、母が、「あら、やるじゃない」、と笑いを含んだような声でつぶやいていく。私は、目を閉じかけながらうつらうつらしている葵の様子がうれしくて、このまま寝かそうと、葵の動きに集中する。その瞬間、葵がジタバタ動き出し、ぐずり出す。私はあわてて、何とか葵を自分の腕にまた抱きくるめようとするが、葵は本格的に泣き出す。夜も遅くなり、母が葵を抱き取る。母は、笑いながら、「今『寝るぞ』って思ったでしょう？赤ん坊はね、眠れ一って思えば思うほど、ギンギンに起きてきちゃうよ。眠らなくてもいいよって思ってるって寝ちゃう。こっちの穏やかさとか気持ちの高ぶりを感じるのかな。不思議だよね」、と私に向かって言い、薄目を開けている葵に、「寝なくていいよ。ずっと起きてていいよ」、と言う。葵は、母に抱かれてもぞもぞするのはやめたが、まだぐずっ

ていた。それでも、だんだんと葵の泣き声の間隔が長くなる。母は、葵をじっと見つめて抱きながら、葵の泣き声があがったり、葵の目が閉じたり開いたりするたびに、小さな声で、「あら、寝ちゃうの？それもいいわよ」、「そうそう、起きてなさい」、「ちよんなの？まだこっちにきて日も浅いものね。いろんなことがあって興奮しちゃうよね」、とつぶやく。そして、母が私と翌日の予定などについて話しているうちに、葵は眠ってしまう。母は、「ほらね」、と言いながら、足で布団を整え、葵を布団におろし、掛け布団を素早くかけ、一瞬泣き顔になりかけた葵をトントンと軽くたたいて寝かしつけた。

この時の葵は、眠りかけるほど心地よく、筆者に抱かれている。しかし、筆者が、葵を寝かせようとして、葵の動きに集中するという仕方では抱き方を変えると、葵は、ぐずり出してしまい、それまで心地よく抱かれていた筆者に抱かれ続けることができなくなってしまう。たとえ葵が心地よく抱かれているとしても、筆者が葵の動きの変化に追従している限り、筆者の方から、抱く姿勢を変えたり、葵を眠らせたり、ということとはできない。また、この時期の葵は、自ら何らかの姿勢をとることはしないために、葵の抱かれ方に追従している筆者の抱き方に追従していくことしかできない。したがって、何らかの活動をするためには、筆者の方で、葵の抱き方を変えなくてはならないのだが、その時には、葵の「身体の動きに合わせながらも、同時に」、葵を抱く筆者の「身体の姿勢や動きの変化に」葵の「身体の変化を合わせるようにしなければならない」(p.104)。

この[記録5]の場面で、葵が眠そうにうつらうつらとしはじめたので、筆者は葵を寝かせようとしていた。筆者が寝させるような抱き方に変えたのに対して、眠りかけていた葵は、手足をジタバタさせ、ぐずり出す。葵の抱かれ方の変化は、寝かせようとしている筆者の抱き方の変化と全く対応していない。葵は、寝心地のよい抱かれ方へと抱かれ方を変えるどころか、ジタバタと動き出す。筆者が、心地悪く抱かれている葵の身体の動きに追従して抱きくるめようとするれば、先にも考察したように、さらにまずい仕方では抱くことになる。そして、抱かれ心地がますます悪くなっていく葵は、ついには、本格的に泣き出してしまふ。

他方、母は、葵を抱いて、落ち着かせていく。この時、筆者にとらえられるのは、母の言葉と、徐々におさまっていく葵の泣き声だけである。葵が眠りについていくようにするために、さらには葵を寝かす布団を

準備するために、母の抱き方は変わっていくはずである。同時に、葵の抱かれ方も物理的には変化しているはずだが、葵は、ぐずり出すことなく、徐々に眠りそうになり、ついには眠ってしまう。すなわち、葵の抱かれ方の変化と母の抱き方の変化は、それらの変化を見ている筆者に、葵と母のそれぞれの変化を感じさせないほど一体化している。「こっちの穏やかさとか気持ちの高ぶりを葵が感じる」という母の言葉からすると、上手に抱いている母には、葵の抱かれ方の現われや自分の抱き方や気持ちがまるで一体となっているかのように感じられているようなのである。

葵を上手に抱き、抱き方と抱かれ方の変化とが一体化しているとは、どのようなことなのだろうか。筆者は、母が葵の動きの一つひとつに対応しているかのように葵を上手に抱くを見て、母を真似て葵の一挙一動に対応して抱こうとする。しかし、葵は、身体を縮めたり、足を投げ出したりし続けるため、筆者にとって、葵の動きはきりが無い動きとなってしまう。母は、筆者の腕の中できりもなく動いていた葵を抱き取り、すぐにすっぽりと包み込んでしまう。上手に抱くことと上手に抱けないことを、心地悪く抱かれている葵の動きに追従することと、心地よく抱かれている葵の動きに追従していることとの違いとしてとらえるだけでは、葵の動きに追従するという同じ事柄を、結果の違いからのみとらえることにしかなくなってしまう。

なぜ、上手に抱けることと上手に抱けないことが起こるのだろうか。[記録2]は、筆者が葵を上手に抱くための身体姿勢のとり方を母に聞いている場面であった。筆者は、葵を抱いている母の仕草を真似て抱く格好を作り、母に見せる。母は、そんな筆者を見て、最初のうちは、もう少し葵をすっぽり包むように抱っこした方がいい、と言って、葵を上手に抱いている自分の抱き方を筆者に見せていた。しかし、母は、ふと口をつぐみ、筆者に抱き方を見せることもやめてしまう。そして、「赤ちゃんと一体化して同じレベルになる」などと言いはじめ、或る特定の抱き方で葵を抱くことに限定されることのない仕方で、葵を上手に抱くのに必要な何かを伝えようとしているようだった。母の言葉を借りれば、筆者には「照れがあり、葵をしっかり受け止め、葵と二人の世界に入り、一体化して同じレベルになる」ことができない以上、筆者は、たとえ上手に抱いている母と表面的には同じような格好で抱くことができたとしても、実際には葵を上手に抱くことができないことになる。筆者に自分の抱き方を見せることをやめてしまった母の行為や、一体化して同じレ

ベルになるという母の言葉は、抱き方以外にも問題とされるべき何かがあることを暗に示しているのではないだろうか。

3. 「上手に抱く一心地よく抱かれる」という一体的生起の可能性

葵を上手に抱くためには、葵が心地よく抱かれるような「身体姿勢を未だ実現されてはいない」葵の「身体姿勢の可能性とし、この可能性の実現をめざして」(p.104)、まず筆者の身体が「上手に抱ける可能性へと予めすでに投げ込まれており、この可能性へと向けて」(pp.104-105)、筆者の方が「抱く姿勢を変えていかなければならない」(p.105)。また、葵も、「心地よく抱かれるような可能性へと予めすでに投げ込まれており」、筆者の抱き方の「変化に応じて、この可能性を実現していかなければならない」(p.105)。そして、外界の対象を知覚する際には、私の身体と対象の現われとが一体的に調和しつつ変化しているように¹⁶⁾、一体的に抱き・抱かれているためには、「両者の身体が一体的に調和しながら変化していかなければならない」(p.105)はずである。しかも、抱き・抱かれている時には、外界の対象を知覚するのは異なり、筆者にとっては、筆者に抱かれている葵の身体の変化が、葵にとっては、葵を抱いている筆者の身体の変化が、他方の身体の現われの局面となる。したがって、葵と筆者の身体が一体的に調和しつつ変化するためには、「それぞれの身体の変化とその身体の現われの局面が両者にとって同じになるように、『上手に抱く一心地よく抱かれる』という一体的生起の可能性へと両者の身体が同時に投げ込まれていなければならない」(p.105)のである。

他方、[記録4]の事例では、葵の動きがいつまでも続くように、そして、いつまでも続く葵の動きに対応して抱く筆者自身の行為が「きりが無い」ように、筆者は感じている。葵が足を投げ出すという一つの行為に対して、この足の動きには何の意味があるのだろうか、どこが苦しいのだろうか、と思っている筆者の身体は、葵を上手に抱くことができない可能性へとすでに投げ込まれてしまっている。この時、葵をして心地悪く抱かれるような可能性を実現させてしまっている筆者には、葵の身体の動きの一つひとつは、抱かれ心地の悪さを示している動きとしてしかとらえられない。そこで、筆者は、葵の動きを何とか抑えようとしてひたすら抱きくるめようとする。しかし、そうしている筆者の身体は、葵が心地よく抱かれる身体姿勢の可能性へとすでに投げ込まれていないために、葵の身体姿勢の変化と一体的に調和しつつ変化していくことはない。

また、葵にとっても、自分の身体姿勢の変化を抑えなくてはならない動きとして働きかけてくる筆者の身体姿勢の変化は、葵自身の身体姿勢の変化と一体的に調和するような変化とはならない。

この時期の葵は、手足を投げ出したり、身体を突っ張らせたり縮めたりする時に典型的となるように、他者によってただ受動的に抱かれているだけではない。葵の身体は、心地よく抱かれる可能性へと投げ込まれたいにもかかわらず、葵を上手に抱くことができない筆者の身体の変化に阻止されて、この可能性を実現できないでいる。

そこで、次に、筆者が上手に葵を抱けている時、すなわち、筆者の身体が葵を上手に抱けるような可能性へと予めすでに投げ込まれている時には、葵と筆者はいかなるあり方をしているのかを、記録に即して明らかにしていきたい。

[記録6(0;30)]葵は、抱き上げられた時から、泣き止み、私の腕にすっぽりとおさまっている感じだった。すぐに葵は、ウトウトして、目をつぶりかける。私は葵を下ろそうとするが、葵は表情をフニャッと崩して泣きそうになる。私はやっぱりだめかと思いつながらすぐに抱き上げる。葵は、またすぐに泣くのをやめ、心地よさそうな表情を浮かべる。私は、葵を笑顔で覗き込み、「君はげんきだね。ママに抱っこされてたいの？うれしいこと」と言いながら、葵をきゅっと抱きしめ、軽く揺らしてあやす。葵はまた徐々に眠りそうな感じになる。私は、次の授乳時間までにできることが次々と頭に浮かんでくるのを振り払い、「そんなことよりも君が気持ちよく眠れるかだよ」と言いながら、また葵の顔を見つめる。そのまま、ふと気がつく、私は、葵の安らかな表情を見つめながら、投げ出された葵の足をそっとくみこんでいた。そして、満足感を覚えつつ、明るい部屋を歩き、窓の外を見ては、時折腕からこぼれてくる葵の手や足をくるんだり、ずり落ちそうな葵のからだをそっと持ち上げたりしていた。葵はついに眠る。

葵を上手に抱けている時には、筆者は、葵の顔を見たま、投げ出された葵の足をくるむというように、葵の手足の一つひとつの動きを確認することなく、葵が心地よく抱かれる姿勢へと抱き方を変えていける。葵は、下ろされると泣きそうになり、そこで再び抱かれると、心地よさそうな表情を浮かべる。この時の葵は、まさに上手に抱かれる可能性へと投げ込まれているのであろう。確かに、葵の表情を「心地よさそうだ」

ととらえているのは筆者である。そして、筆者は、そのようにとらえることで葵を抱えていることが楽しくなるという仕方に関わっている、ともいえる。

しかし、こうした関わりが生じたということは、葵の表情を心地よさそうな表情としてとらえられる感覚が、その時の筆者の中で生じていたのであり、葵と筆者の関わりにおいて、そのような感覚を生じさせるような何かがあった、ということである。葵が心地よさそうな表情を浮かべたとしても、以下にあげる記録場面で生じているように、葵の表情の変化が、筆者の感覚の変化と一体となっていなければ、葵の心地よい表情が筆者を困惑させることにもなる。

[記録7(0;10)]私が、葵のお尻の汚れを素早くふき取り、オムツをはかせる前に、お尻がむれているので、ぱたぱたと扇いで風を送ると、葵は何とも気持ちよさそうな表情をする。私は、いつもできずにいた「気持ちいいねえ」などという声かけをして、葵の方を覗き込んでいると、(持ち上げていた)葵の足がふっと軽くなる。私がなんだろうと思って下を見ると、葵はウンチをしている。新しいオムツだけでなく、洋服までがあつという間に汚れていく。私は葵の足をもったまましばらく硬直していた。葵は、何事もなかったような、ほけーとした、全くいつも通りの顔をしている。私は、何をしていたのやら全くわからず、かなり無駄なことをしながら、そして、さっきまで整頓されていたのが嘘のように散らかっていく部屋の状態に目をつぶりながら、葵のからだをきれいに拭いて、新しい服の上を下ろした。一段落がついて、私がほっとしたとたん、葵は、様々な表情を変えながら、そのままおしっこをした。ああと思っても何もできないまま、葵も新しい洋服もみるみるおしっこに浸かっていく。そして、頭までおしっこに浸かっているのに、相変わらず何事もなかったかのような葵の涼しげな顔を見ると、私は、違和感と同時に疲労感を覚えて、そばの椅子にそのまま座り込んだ。

葵の洋服がおしっこで濡れてしまっているような場合、葵が涼しげな、すなわち不快感を感じさせない表情を浮かべていても、そのような葵の表情に対し、筆者は安心して葵と関わることはできない。[記録6]の場面で、葵が浮かべていた心地よさそうな表情は、筆者が抱いた時から感じていた「すっぽりとおさまっている感じ」と一体となって生じていたものであろう。その時、筆者は葵を上手に抱くという可能性をすでに生きてしまっている以上、筆者にとって、葵の動きの

一つひとつは、きりのない動きではない。[記録6]の時点で、葵と筆者の身体は、「上手に抱く一心地よく抱かれる」という一体的生起の可能性へと同時に投げ込まれているのである。

C 身体活動における作用の及ぼし合い

以上では、身体的に直接触れ合っている時の葵と筆者の身体について考察してきた。しかし、身体が直接触れ合っていない場合でも、身体が直接触れている時と同様に、葵が自分の身体状態を感受していることに基づいて、筆者は葵と関わるができる。可能な身体活動が限られている葵と身体的に直接触れ合うことなく筆者が関係するとはどのようなことであるのかを、以下にあげる記録場面に即して、考察したい。

[記録8(1;7)]最近暑い日が続いていたが、今日は気持ちのいい風が吹いている。母と私は葵をできるだけ風通しのいいところに寝かせた。今日こそは、葵はよく眠ってくれるだろう。それなのに葵は、そわそわと落ち着かない様子で、眠らない。母が、「風が嫌なのかもね」と言い出し、別のところに葵を寝かせた。葵がすやすや眠ったので、今日寝なかった原因は、寒かったという結論に落ち着いた。

「風をいれてあげましょう」と言っていた母は、「どこからかふわって感触がきたら、寝そうでもびっくりして起きちゃう感じだったのかも。風が気になっていたのかもね」と言う。私がそうなんだと感心していると、母は、感心している私をいぶかしげに見つめ、「わからないよ。ただ、泣いてたら、その時はなんだろうねって、あやしなから、必ず後で考えないと。泣いている原因は絶対あるんだから。昔、お姉ちゃんがずいぶん泣いてね、なんだろう、なんだろうっていろいろやって、最後にやっと洋服の中から髪の毛が見つかって、あ、これだってわかった。それまでずいぶん泣かしてかわいそうだったけど、髪の毛がとれたら泣き止んだの」と言う。

[記録9(1;8)]前日、寒くしすぎたようなので、私は、『育児大百科』を読んで、室温計と湿度計を見えるところに置き、本に書いてある通り、室温を外気温と5度以上の気温差がつかないように部屋を締め切った。祖母が、二階から降りてきて、「葵ちゃんは暑いんじゃないの?」、と言う。室温計は24度であった。「だいたい茜も暑くないの?」と聞かれ、私は自分が暑いかどうか考えてみると、それもわからなくなってきた。とりあえず昨日、葵は、寒かったらしく、毛布をかけられたら泣き止んだ。祖母は、

「昨日は泣いたからこれでいいと思う」と答える私をいぶかしげに見て、葵の首筋を触り、「でも汗ばんでいるよ」と言う。風をいれると、なるほど、気持ちがいい。それでも、しばらくすると葵は泣いた。葵は風が嫌なのかもしれない。私は眠くてかなり疲れていた。葵は泣く。私は、葵を風のあたらない部屋に連れて行き、そばに寝転がった。何が何でも寝てほしかった。

私は、なかなか寝ない葵を散歩に連れて行った。家に帰ってから、外が暑かったので、私は葵に白湯やほうじ茶をあげるが、葵は飲まない。葵は、しばらく私に抱っこされて、やっと眠ってくれる。

[記録8]の場面で、葵が泣いているのは、風が吹きつけてくるのが不快であるためなのか、他の原因のためなのかは、定かでない。中田と共に考察したように、関わる者は子どもへの自らの作用を敏感に蒙ることによって、それまでとは異なるレベルで身体活動を主題化することができる。この場面における母と筆者は、涼しい風にあたることで葵が心地よく眠れるように、と葵を風あたりのいい場所に移した。しかし、葵は心地よさそうな様子を見せない。筆者の思いとは全く異なるあり方をしている葵は、心地よいと思われるところに移してあげたのに眠らない、と筆者には思えてしまう。この時の筆者は、葵の活動からの作用を受けるにとまどっている。しかし、母は、葵を風あたりのいい場所に移したという自らの行為を自分で敏感に蒙っていることにより、葵は風にあたることで心地悪さを感じているという、この場所に葵を移した時に主題化されていた感覚とは正反対の感覚を、こともなげに主題化する。「風をいれてあげよう」と言い出した母が、すぐに「葵は風が嫌なのだ」と言う、というように、葵が泣いている原因についての母の言葉が、わずかな間に変わってしまっているのに、その変化を母自身がほとんど問題としていない、ということが筆者にとっては不思議であった。しかし、母からすれば、確からしい原因を得て納得している筆者のあり方の方が、むしろ理解できないようである。

[記録9]の場面で、散歩に行く前の筆者は、自分の疲労感を感じており、泣き声をあげるという葵の活動に対応しているだけになっている。確かに、散歩に行く前の筆者は、葵を泣き止ませようとして葵の泣き声に対応しているため、一見すると、一方的に関わっているのではなく、葵という一個の存在に関わっているように思われる。しかし、筆者は、葵の泣き声を聞いて、部屋の温度を変えるという対応をしておきながら、

葵の首筋に汗がにじんでいるにもかかわらず、「暑い」という感覚を主題化することができなくなってしまう。この時の筆者は、葵への自分の作用を自分自身で敏感に蒙っていない。そのため、葵が目の前にいるにもかかわらず、自らの行為を葵の存在をも含み込んだものとするのができず、一方的に葵からの作用を受け、一方的に筆者の作用を葵に及ぼしているだけなのである。

葵の行為に対応しているという点では、散歩に行く前と行った後とでは、筆者は同じ関わり方をしている、といえる。だが、散歩から帰った時には、戸外の暑さから、葵は喉が渴いている、という感覚が筆者にも主題化される。そこで、筆者は葵に白湯をあげ、葵が白湯を飲まなければ、白湯をあげていた時点ですでに喉の潤いについての感覚を主題化していた筆者は、葵の舌に感じられる味覚を主題化することができ、すぐにほうじ茶を準備する、というように、様々な活動を起こせる。

以上のように、身体同士が直接触れ合っていないくても、母や筆者は、葵が内的な不快感を感受して泣いているという印象をもちつつ、自らの作用を受動的に蒙るという仕方で、葵に関わることができるのである。

おわりに

本稿では、筆者の子どもと筆者自身の日々の関わり方の記録に基づいて、個別的な場面における子どもと筆者との関係がどのようなものであったのかを解明することを試みた。IのBで述べたように、身体的な対峙は、関係の当事者にのみ生きられるにもかかわらず、関係しているまさにその時点では、当事者には気づきえないことである。しかし、関係の生起そのものは当事者のうちに保持されているため、本稿では、当事者において生きられているこの関係を解明することが可能になったのではないだろうか。

(指導教官 中田基昭教授)

(付記)本稿は2002年度に東京大学大学院教育学研究科へ提出した修士学位請求論文「乳児期初期の母子の身体関係について」の一部を加筆・修正したものである。

注

1)ブーバー, M.『我と汝・対話』田口義弘訳 みすず書房, 1978, pp. 7-8

- 2)同上, p.20
 3)同上, p.27
 4)同上, p.13
 5)同上, p.24
 6)同上, p.19
 7)同上, p.24
 8)鯨岡峻『関係発達論の展開』ミネルヴァ書房, 1999, p.90
 9)鯨岡は、メルロー＝ポンティに基づき、情動制御などを例とする乳児期の関わりが、「能動—受動の交叉」(鯨岡, 前掲書, p.100)という事態において生起することを強調する。しかし、鯨岡のいう能動と受動の交叉は、関わりが「養育者から一方通行のものでないこと、その関わりは子どもによって引き出されつつ、[養育者が]子どもの情動を調律・制御している」(同所〔 〕内引用者)という事態のことであり、やはり、子どもと母親のそれぞれにおける作用の時間的な連鎖としての相互性において生起するものでしかない。根源的な関係とは、こうした事態ではないことを以下で明らかにしたい。
 10)ブーバー, 前掲書, p.25
 11)中田基昭『現象学から授業の世界へ』東京大学出版会, 1997, p.157 []内はブーバー, 前掲書, p.32
 12)本稿では、中田基昭 編著『重障児の現象学』川島書店, 2003からの引用箇所はすべて頁数だけをもって指示する。
 13)中田基昭『重症心身障害児の教育方法』東京大学出版会, 1984, p.491
 14)中田は、流れの比喩を用いて、作用の流れとしての関係の潜在性と顕在性について述べている。cf.中田, 前掲書(1997), pp.156-157
 15)cf. 同上, pp.156-158, p.163, p.169
 16)中田は、知覚におけるこうした一体的生起を、フッサールのキネステーゼについての記述を手がかりとしながら、具体例に即して現象学的に記述している。cf. 中田, 前掲書(2003), pp.94-98